

ふるさとを語る

兵庫県は、5つの国から成り立っており、多彩な人材を輩出しています。そこで、毎回、さまざまな分野で活躍中の方に「ふるさとひょうご」を語っていただいています。

2020年東京でのオリンピック開催が決まり、スポーツへの関心が高まる中、今回は、日本国内の陸上競技大会開催など陸上競技の普及・振興に取り組む公益財団法人日本陸上競技連盟（日本陸連）専務理事の尾縣貢さんに、大久保県人会事務局長がお話を伺いました。



尾縣 貢

(おがた みつぎ)

加東市（滝野町）出身

県立小野高等学校、筑波大学卒業

1984年 筑波大学大学院修士課程体育研究科修了

1994年 筑波大学講師

1998年 筑波大学助教授

2007年 国立大学法人筑波大学大学院准教授

2009年～現在 国立大学法人筑波大学大学院教授

2011年～現在 公益財団法人日本陸上競技連盟専務理事

日本陸連専務理事をはじめ、様々な立場でご活躍ですが、まず、現在の状況を教えてください。

本務としては、筑波大学教授として大学で教えています。今までは陸上競技を中心にスポーツコーチングやトレーニングについて教えていましたが、2年前からは東京キャンパスで、社会人のマスタコースを教えています。スポーツプロモーションを専門にした専攻課程で、私の担当は、トレーニングのマネージメントだけでなく、スポーツ団体の経営マネージメントなど、様々なスポーツに関係するマネージメントについて学んでもらうコースです。

社会人の学生なので、各種競技団体・協会の専務理事や、強化委員などが在籍し、ここで教えるのは、現役学生を教えるのとはまた違った面白さがあります。現役学生は選手として育てる楽しさがあります。即戦力ですので、既に活躍されている方に、さらに知識と経験積んでいただいで、スポーツ界でステップアップできる、すぐに活躍して、日本のスポーツ界を変えることが出来る、そういう楽しみがあります。今は、1学年24人で、私のコースにはこのうち12人が所属しており、これを4人の教授団で教えています。東京キャンパスでは、こうしてスポーツ界の即戦力を強化する取組に力を入れています。

また、筑波キャンパスの大学院でも、博士課程の若い現役学生に研究指導をしています。

教授としては、このように、社会人向けのマネージメント、学生向けのコーチングを中心に教えている状況です。

専務理事としての職務もお忙しいのではないですか。

4年前から、日本陸連の専務理事になりましたが、だいたい10時から15時くらいまで日本陸連で執務し、その後、講義の準備をして、6時20分から大学で講義をするというスケジュールです。なので、休みはほとんど無い

です。

特に今は、スポーツ庁の創設が予定されるなど、スポーツ界が大きく変わろうとしている時なので、一番忙しい時期なのではないでしょうか。

ふるさとの思い出などは、何かありますか。

滝野町の田舎でしたので、小さい頃は、野原を走り回って、川で釣りをしたり、夕方までソフトボールをしたりと友達と遊んだことを思い出します。小さい頃から体を動かすことは好きでしたが、特に何かのスポーツに打ち込むということはありませんでした。

中学校時代は、野球部でのが一番思い出に残っていますが、小野高校時代は、とにかく勉強がきつかったことを思い出します。陸上の試合で、金土の授業を抜ける事が多く、友達にノートを借りて帰り、家で予習・復習をするのが大変でした。また、早朝練習の疲れで、授業中ウトウトしているところも当てる先生がいたりして、勉強は厳しかったですね。

陸上競技を始められたきっかけは、何だったのですか。

中学校の体育の授業です。

もともと中学校では、野球部に所属していました。でも、2年生の時たまたま、授業でハードルを跳んだのがきっかけです。その時の感覚が何ともいえず気持ちよく、フワツと跳んだ後、パツとリズムが切り替わるところなど、これまで感じたことのない面白さを感じました。それをきっかけに、野球部に所属したまま、自己流でハードルをやりました。

全日本中学陸上競技選手権大会の100mハードルで優勝されていますね。しかも、日本中学記録ですね。コーチなどはいたのですか。

中学校には陸上部がなかったので、コーチもいませんでした。完全に自己流で、1人で練習していました。今から思えば技術的にも半分くらいは間違っていましたね。

練習内容も、野球の練習の合間にこつそりと練習するような状況でしたので、はじめは家に帰ってから、裏のあぜ道に、自分で作った竹製のハードルを並べ、それを跳んでいました。

中学校の全国大会は、国立競技場だったのですが、オールウェザーのウレタントラックを走るのもその時が初めてでしたし、スターティングブロックの付け方さえ分かりませんでした。

こんなふうに中学時代は、野球とハードルの両方に取り

組んでいたの、ハードルの県大会決勝戦を明石の競技場で走った後、すぐに高砂まで行って、ユニフォームに着替え、野球の東播大会の決勝戦に出たことを覚えてます。

それでも、いきなり全国大会に出て優勝するのですからよほど才能に恵まれておられたのですね。その後、小野高校に進学され、ここでもジュニアオリンピックとインターハイで優勝という成績をおさめられていますね。

ですが、それまでの自己流の練習で悪い癖がついていたので、その頃からだんだん勝つのが難しくなってきました。確かにインターハイでは優勝しましたが、ハードルの高さが約7センチ上がる全日本選手権では、技術的な欠点に影響してうまくいかなくなりました。最初の指導がいかに大切かということですね。それでその後、ハードルから十種競技に転向したのです。

そういう理由で筑波大学に進学されてからは、十種競技にとりくまれたのですね。しかし、十種競技といえ、ハードルだけではなく、跳躍種目や投てき種目も必要になりますね。非常に厳しい競技だと思えますが、その魅力などを教えていただけますか。

100m、110mハードル、400m、1500m、走幅跳、走高跳、棒高跳、砲丸投、円盤投、やり投の十種目ですが、ご承知のように、例えば、長距離選手と投てき選手では明らかに体格が違います。もちろんトレーニングの内容も違います。それを一人の選手がどうやってこなしていくか、というトレーニングを組んでいくか、そういう「矛盾の克服」に挑むところが、この競技の魅力です。

私の場合、高跳びと砲丸投げが苦手でした。本場に過酷な競技ですが、怪我などはなかったのですか。また、引退はいつでしたか。

全身怪我だらけです。しかし、スポーツ選手は、潰れるか潰れないかの境目を見極め、高いレベルのトレーニングを続けていく事が求められます。その見極めをしてあげるのが、コーチの大切な役目ですね。

引退は、就職した26歳の時です。その後、大阪女子大学の助手という立場で5年間、一般体育に取り組みました。例えば運動の苦手な人に、どうしたらスポーツに親しんでもらえるかというようなことです。その後、奈良教育大学に移り、4年間、学校体育の研究に没頭しました。こうして9年間、専門的な競技から少し離れた立場で研究できたことで、私自身も、競技一点張りの頭を一度整理し、冷静

にスポーツを見られるようになったことは良かったと思っています。ですから、筑波大学に戻った今も、私は「勝利至上主義」の考え方はもっていませんし、そういった指導もしないよう心掛けています。

東京オリンピック開催が決まりました。日本陸連の専務理事として今後の活動についてお話しいただけますか。

オリンピックをきっかけにして、ハード・ソフトの両面でどうレガシー（財産）を作っていくかということですね。つまり、新国立競技場などを含めたハード面の整備を進め、オリンピック後の日本に、どれだけスポーツに取り組みやすい環境を展開していくかということ。また、ソフト面では、指導者の育成をどうしていくかということ。スポーツは指導者の力が大きいので、指導者の育成システムを、国民の関心が2020年に向いている今作っておく必要があります。各地で競技できる環境を整え、拠点を作り、そこに優秀な指導者がいて有望な選手を発掘できる。そういうシステム作りを取り組んでいく必要があると考えています。

それに加えて、オリンピック代表選手をどう強化していくかということですね。2020年に、日本が何で金メダルを取れるかと考えた時、陸上ではやはり「マラソン」ということになりそうです。例えば、高温多湿の日本の夏の環境をどう克服し、日本人選手に有利に展開させるか。そうした対策をしっかりすることが必要でしょう。マラソンは、国民の関心も高いですから。

それ以外ではリレーでしょうか。桐生選手など有望選手が育っているの、ジャマイカ・アメリカに続くところにいけるよう、頑張ってもらいたいです。また、野球文化の日本としては、やり投も期待できます。神戸出身のデーヴィン元気選手もいますね。神戸市には競歩の日本選手権開催に協力してもらっていますが、競歩もメダル獲得候補目なんでしょう。

兵庫では神戸マラソンを、これまでに3回開催しています。これについてはいかがですか。

神戸は、もともとスポーツに対する理解があり、しかも「神戸」という名前を聞いて、そこで走ってみたい、競技してみたいと思わせる発信力がある。そういう魅力がないと、なかなか大会も発展しないのですが、それが神戸で大きな大会を続けることは、大きな意味があります。兵庫を含めた関西では、年齢30歳以上であれば、誰でも

参加出来るスポーツイベント「ワールドマスターズゲーム」をオリンピックの翌年に開催しますが、これについてはどうですか。

世界中から三万人規模の参加を見込むスポーツイベントですから、まずスポーツ人口を増やすことで大きな貢献をしたいと思います。しかしそれだけではなく、今の日本のスポーツが、スポーツ基本法でいうところの「スポーツ文化」の域に達するために必要なもの、つまり、「誰でも気軽にスポーツに参加できること」「障害を持った方でも隔てなくスポーツに参加できること」この2つを体現した将来日本が目指すべきスポーツの形を、全国に示すことができる非常に意義深いものになると思います。

オリンピック関係ではもう一つ、兵庫県は合宿地としての名乗りを上げていますが、尾縣さんから見られていかがですか。

良いと思います。合宿地の条件としては、「施設が整っていること」「食べ物美味しいこと」などがあげられますが、兵庫はこの両方が備わっています。また、県民・市民の理解と、行政の理解がないと成り立たない事ですが、これもそろっています。また、「神戸」など日本の中でも特に知名度が高い都市があつて、選手が行きたいと思う発信力を持っているいい土地だと思います。

陸上競技に取り組む兵庫県の多くの少年少女と、彼らのコーチに、それぞれメッセージをおねがいします。

陸上競技は、努力すれば必ず自分に跳ね返ってくる競技です。とにかく目標と希望を常に持ち、考えながら、そして楽しみながら競技に取り組んで下さい。記録が伸びなくて苦しいときでも、希望を持って、楽しみを見つけて続ければ、必ず自分の目標は達成できます。そうすれば、スポーツは決して苦しいだけのものではないということが分かってもらえると思います。

指導者の方に。スポーツを変えるのは指導者です。もちろん競技者は、その競技に大きな影響を与えますが、競技者を育てるのは指導者です。そのプライドと、自分がその選手の未来を背負っているという責任感を持たなければなりません。選手がこの先どうやって競技を続けていくか、またさらにその先、指導者として、あるいは社会人としてどう活動していくか、そこまで含めて選手の未来を考えてあげないといけません。それが本当の意味での「アスリートファースト」であつて、目の前にいるときだけ頑張らせれば良いという考えは、良くありません。